

9月17日(木)放送 **「テーマ “見る” 不思議」****「錯視芸術の巨匠たち 世界のだまし絵作家20人の傑作集」**アル・セツケル／著 坂根 巖夫／訳
創元社 2008年4月発行
2階一般開架図書 (請求記号 720.8)

ちょっとお疲れの夜や、のんびりすごす休日に…。不思議な絵を眺めて、頭をやわらかくしてみませんか？

ありえない奥行き絵。逆さまにすると突然顔が浮かび上がる絵。ゆがんだ物体が、鏡に映すと美味しそうなお弁当に大変身…。目や脳を華麗にだます、美しく面白い作品がぎっしり詰まった、何度でもめくりたくなる一冊です。

高知県出身の視覚科学者、北岡明佳さんも、古今東西の“錯視芸術の巨匠”20人の中に選ばれています。絵を離したり近づけたりすると、光の粒がキラキラと目に飛び込んでくる作品『ワープ』や、見つめるとカラフルな円がぐるぐると回りだす『蛇の回転』、などなど…。「目をみはるような効果だ」と紹介されている彼の作品は、びっくりの連続です。

「正面を向いた鳥の絵が描けますか？」山口 真美／著
講談社 2007年7月発行
2階一般開架図書 (請求記号 141.2/新書)

思わず、「どうだろう!？」と鳥の絵を描いてみましたが、確かに正面向きは、斜めや横向きより描きにくい! なぜなのでしょう。

絵を描く前提となるのは、「見る」こと。この本は、「見る」こと不思議さを、様々な実験の結果を通して解き明かしてくれます。

例えば、目の前の人突然すり替わってもほとんどの人は気がつかない、といった、思わず驚いてしまう実験結果が紹介されています。

それらから分かるのは、今見ている世界は、実は自分が脳の中で作り出した世界だということ。読み進めると知的好奇心がくすぐられて、見えなかったものが見えてくるような気がします。

ちなみに、斜め方向が、最も物を記憶できる「見やすい視点」で、絵も描きやすいですよ。

9月24日(木) 放送 「テーマ 犬」

「ホワ物語」

西村 光一郎／著
高知新聞社 2007年 9月発行
2階郷土開架図書 (請求記号 K/914/ニ)

犬と共に暮らす方はたくさんいるでしょう。そしてその数だけ、それぞれの物語があります。

この本の舞台は、高知県土佐清水市。この地の幼稚園の園長である西村氏の元に白い子犬がやってきました。「親がシロなら子はホワイトだ。ホワイトのホワと呼ぼう。入園させよう。面接試験は合格だ。」園長の一声により入園し、毎日一緒に通園したホワ。園児からいつのまにか先生になっていたホワ。

共に生きてきた、かけがえのない16年の日々を綴りながら、「いのち」への愛情、尊さが伝わってきます。

「犬と話をつけるには」

多和田 悟／著
文藝春秋 2006年 6月発行
2階ジョブ開架図書 (請求記号 645.6)

この本の著者、多和田悟氏は、映画化もされた『盲導犬クィールの一生』のクィールを育てた訓練士の方です。彼の訓練士としての体験や経験から得たものを交えながら、「どうしたら、犬がわかるようになるか」ヒントを教えてください。犬とのつながりができてくれば、自然と犬と会話ができる。この会話を多和田氏は「犬と話をつける」と呼んでおり、訓練している犬が盲導犬になる前に「お前、盲導犬やる？」と「話をつける」そうです。

「盲導犬が人生を変えるのではなく、自分自身で人生を切り開く、その人生をデザインし直すきっかけとして盲導犬とともに歩行訓練を手伝いたい。そして、どんな状況にあっても、今ここにわたしがありそれが大事なのだと思い続けられること、自分自身はかけがえのない存在だ。」と伝えていきたいという彼の思いが心に響きます。

「うちの犬そろそろトシかしら」

ごしま れいこ／著
モダン出版株式会社 2001年 6月発行
2階ジョブ開架図書 (請求記号 645.6)

大切な家族の一員として迎え入れたペット(犬)も、人間より先に年をとってしまいます。そんな年老いた愛犬との暮らし方や日常のアドバイス、介護について、またその体験談などが記されています。

愛犬のいる生活を通して、学び得ることがたくさんあります。これは犬に限らずあらゆる生命についてもいえることだと思います。出会いがあれば、別れもあります。別れは辛く悲しい。だからこそ、どれだけ楽しく悔いのない生活を過ごしていくかを大切に、愛犬には、幸せな一生だった、と思ってもらいたい。それは飼い主にとってもきっと大切な宝物となることでしょう。